

## 第2部

### シンポジウム

# カレッジスポーツの限界と可能性

長澤 和輝 (専修大学サッカー部主将)

田中 理恵 (日本体育大学助教)

山田 健太 (専修大学文学部教授)

**司会** それでは、シンポジウムの先生方を紹介させていただきます。日本体育大学助教でオリンピックでいらっしゃる田中理恵さんです。続きまして、専修大学サッカー部ならびにユニバーシアード日本代表キャプテンの長澤和輝さんです。そして、本日のシンポジウム司会進行を務めていただきます山田先生です。どうぞよろしくをお願いします。

**山田** さあ始めましょう。2人とも少し緊張しているようですね。仲間がたくさん来るでしょうから、途中で掛け声ありですので、どうぞ自由にやってください。

まずは自己紹介も踏まえてお聞きしたいと思います。報道などによると、田中さんはこの1年は競技生活を少しお休みして、けがのリハビリに専念しながら教員生活の1年目を送っていると書かれていましたが、けがの具合はもういいでしょうか。

**田中** はい。こんにちは、よろしくお願いします。オリンピックに懸けた思いが強過ぎたため、オリンピックが終わってから体を壊してしまったので、今年1年は休養する形で、今は、日本体育大学でリハビリやトレーニングをしています。けがの痛みはなかなか治らず、うまく付き合っていくべきでしょうか。でも、今、日体大を代表して、こうして体操の楽しさやスポーツの楽しさをいろいろところで話せてもらうことで、また新しい自分を発見できていくので凄く充実した1年を送っています。

**山田** 羨ましいです。輝いています。長澤さんは、リーグ戦もほぼ中盤から終盤にかかってきて、ユニバーシアードの連戦もあり疲れが出始めた頃ではないかと思いますが、体の具合はどうですか。好調ですか。

**長澤** そうですね、今、専修大学のサッカー部は1位で折り返せて、チームも徐々にいい方向に向かってるので、自分もチームもいい状況だと思います。

**山田** 国士館でしたか、この間取りこぼしがありました。うまいければ日体大に当たる前に優勝が決まりますか。

**長澤** そうですね、できれば日体大に当たる前に優勝を決めたいと思います。

**山田** そんなお2人に、これから1時間ほどゆっくりとお話を聞いていきたいです。まず、田中さん、先ほど出たように、今年の4月からは教える立場になって、これまでの、いわゆる学生あるいはオリンピックの立場から少し変わったと思いますが、何か新しい発見はありましたか。

**田中** 一応、勉強を続けながら生徒を教えるという形でやっていて、自分と比べたらいけないということを、教える立場になって改めて感じました。すぐできる選手と、一から十までコツコツ答えを出しながらできていく選

手と人それぞれで、教えることは本当に難しいと感じながら、でも楽しく教えています。

**山田** 具体的にどんな講義、授業を持っていますか。

**田中** 今年はまだ授業は持っていません。体操競技部を教える立場で、教員としてコーチをしています。


**山田** これまでも、競技と勉強に専念という確かに二足のわらじだったかもしれませんが、それでも全く違うことをするのはなく一つの枠の中で済んでいたことが、今は本来の意味の二足のわらじ生活というか、教えるという少し違う立場にも立たなければならぬことで、時間も足りなくなるかもしれませんし、思考も変えなければいけないかもしれません。その辺はどうですか。

**田中** 今年1年は、自分にとって本当に新しいことばかりで、生活や指導を苦戦しつつも楽しくしています。学生のときは全く違い、自分のことも他人のことも考えなければいけない生活で、少しいっぱいいっぱいになっています。でも、基本的になんでも楽しくしようという性格なので、プラスにしていこうと思っています。

**山田** また後で詳しく聞きたいです。次に長澤さんにお聞きします。二足のわらじ



山田 健太



田中 理恵



長澤 和輝

とは言いませんが、横浜Fマリノスの指定強化選手でしたね。そうすると、大学の体育会としてのサッカー部とは違ったクラブチームのサッカーも体験したと思いますが、客観的に、クラブチームと大学のサッカー部はどう違いますか。

**長澤** 一番大きいのはお金だったりクラブの規模です。例えば、大学は1本シュートを外しても厳しく咎められることはありません。プロでも咎められることはあまりありませんが、例えば、その1本のシュートを外したことで、プロでは何千万円のお金が動くという責任の部分で全然違うと思います。

**山田** それは入ってすぐに感じましたか。

**長澤** サポーターの方などを目で見えて感じました。

**山田** すぐといっても、練習でそれを感じるのなかなか難しいと思いますが、練習の端々でもクラブチームの凄さというか、大学でやっているサッカーとの違いはありますか。

**長澤** 横浜Fマリノスは経験のあるベテランの選手がとて多いチームです。そういう経験のある選手たちと一緒にプレーさせてもらうことで、大学では得られないようないい経験もできましたし、いい話も聞けたと思います。

**山田** また田中さんに戻ります。今、長澤さんが、大学では経験できないことがクラブで経験できたと言いましたが、田中さんの場合は、オリンピックというまさに普通はなかなか得られない経験をしたと思います。その経験は、大学の学生生活とどこでどう接点がありますか。それとも、全然関係ないものですか。

**田中** まず、私の場合は、日本体育大学に入った1年生のときは全国で50位、60位ぐらいの選手でした。ですので、私がオリンピックに出るとは自分自身も思っていませんでしたし、こんなに注目されることも実は全然考えていませんでした。日体大に入ってみると一緒に授業を受けて、放課後は先輩・後輩みんなと一緒に練習をする生活でした。その日常の中で、大学にはトップアスリートも居れば、これからいろいろなスポーツをしようという選手もたくさん居て、私には、トップアスリートと一緒に授業を受けられることはとても嬉しいことでした。

私もそういう存在になりたいと日体大を背負うことの素晴らしさを感じたので、体操競技に懸ける強い思いが持て、オリンピックを目指せたのだと思います。

**山田** トップアスリートと同じ空間と一緒に居ることは素晴らしいですか。

**田中** 素晴らしいです。体操に限らず、水泳、陸上、柔道、レスリング・・・。

**山田** たくさん居ますね。

**田中** はい。とてもたくさん居る中で、体操だけではなく、違うスポーツの練習の厳しさ、楽しさは会話をしながら伝わってくるものがあったので、こういう選手になるのも格好いいと思ったのが印象的でした。

**山田** もしかするとそれは日体大の特徴というか、他の大学にない良さなのかもしれませんが、その中で、普通の学生としての学生生活をどういうふうに送ったのでしょうか。授業は出ていましたね。

**田中** はい、出ていました。私の中では、日体大は特別扱いをほとんどしないという印象です。オリンピック選手になるために、強くなるために、学校から各競技にいろいろなサポートはしてくれませんが、だからといって「練習だけしていなさい」ということはありません。きちんと授業に出て、いろいろなことを知って、仲間とともに勉強をし、刺激し合いながら人間性を高めていこうというのがすごく印象的です。

その中でも、オリンピックを目指すトップアスリートたちも居れば、トレーナーの勉強をしてトレーナーを目指す学生も居ますし、また、クラブを支える役員も居て、そういういろいろな人たちが居るから私たちが強くなれるのだと思ったのも印象的です。



**山田** 今、凄いことを言った気がしますが、それはいつぐらいに気が付きましたか。

**田中** 私は遅かったです。大学1年生のときにはなかなか思えなかったです。大学1年生の冬に脚の手術をして、2年生のときは1年間かけて足のリハビリをしていました。その、少し体操から離れて応援する立場になったときに、選手が一番輝いていますが、輝けるのはサポートしてくれる人たちがたくさん居るからだと感じ、こうやって体操を楽しくできて、自分が好きなスポーツをこんなに一生懸命できるのだと思いました。

**山田** その話はもう少し聞きたいと思いますが、一度、長澤さんの話を聞きましょう。トップアスリートと一緒に授業を受ける経験はあまりないですか。

**長澤** 専修大学にはあまりトップアスリートは居ません。

**山田** 大学内の広報誌を読んでいると、いろいろな人に会えて刺激を受けるので、ユニバーシアードへ行くとワクワクすると言っていましたね。横浜Fマリノスのクラブチームに行っても同じことを感じたかもしれませんが、そういうふうな、ある種トップアスリートと一緒に空間を過ごすというのは、長澤さんにとってはどんな体験でしたでしょうか。

**長澤** トップアスリートというと、アスリートとしてトップであるための秘訣というか、例えば、栄養面にしてもそうですし、時間の使い方にしてもそうですし、この人はこういう考え

方で生活しているのかとか、学ぶことが凄く多かったです。

**山田** その話もまた後で聞きたいと思います。また少し話を変えますが、さっき、田中さんが、授業はちゃんと出ていると言っていたのですが、長澤さんの場合はどうですか。大体授業には出ていましたか。

**長澤** はい、大体出ていました。

**山田** 出ていましたか。誰も頷いてくれないようですが、(会場を見て) 頷きました?大丈夫そうです。出ていたそうですが、普通の学生として大学の授業を聞いて、逆に、サッカーに対しての新しい見方など発見したことはありますか。

**長澤** 私は経営学部ですが、大学1年のときは経営の勉強をしてもあまり身にならないというか、単位を取れば良いと思って授業を受けていました。でもそれではつまらない、面白くないと思って勉強をし始めました。例えば、PDCA サイクルや、会社の組織マネジメントなど、自分のサッカーのチームではどうすべきかと置き換えて考えるようになりました。経営だけではなく、何事にも使えるということを経営学部でも勉強できて、それはためになりました。

**山田** 今の質問は、教員として無理やり言わせたかと思って反省しています。少し質問の仕方を変えて、お二人に同じ質問をしたいと思います。お二人ともまさにトップアスリートですが、どちらかという、勉強をする時間

があれば練習したい、あるいは体をケアしたいと思うこともあると思います。そうすると、逆に、毎日の大学生活を、普通の学生と一緒に時間で送ることにはどんな意味合いがあるのかお聞きしたいと思います。田中さん、どうですか。

**田中** 私の場合は、大学を卒業して大学院へ行きました。1年では普通に大学院の授業を受けて2年になってから論文を書きますが、論文を書くのは人生で初めてだったので、その大変さ、しんどさを大学院2年生で初めて感じました。

論文では、「体操競技における美しさ・芸術性について」ということを研究しましたが、ちょうど2010年の世界体操競技選手権大会でエレガンス賞を受賞したので、いい論文が書けると思いました。でも、2012年にオリンピックが控えていて練習もしたい、一方で、エレガンス賞を取ったからにはこの論文を出してオリンピックへ行ったら最高だ、という考えもありました。

練習は週に1日、金曜日だけ休みで、あとの日は大体5、6時間練習していました。ですが、2011年は論文を書くことによって、1日2時間しか練習ができませんでした。だけど、美しい体操とか、芸術性は何なのかなどいろいろ考えることによって、5、6時間練習しなくても、この論文を書くことで練習していると気が付きました。でするので体を動かすのは2時間ですが、その中ですごく集中力が養われました。両立するのは本当に大変だと思いましたが、頭の中で考えることで体も動くことを改めて知った2011年だったので、勉強より体操をしたい、練習したいというのはそ



の年でなくなりました。

**山田** では取返して聞くと、それまでの学生生活では、こんなことをするのは無駄だと思いましたか。

**田中** 学生の頃は少し思った時期もありましたが、体操を離れて日体大のいろいろな授業を受けることで、人間的にも成長すると思いました。

**山田** 先ほど、最初のときはいい意味の息抜きと言いましたか。

**田中** そうです。

**山田** 少し違った自分をここで発見できる、あるいは、違った見方を発見できるという話が先ほどありましたが、その辺はどうでしょうか。

**田中** そうですね。ずっと練習をして息抜きをする場所がなかったので、授業に行くことによって、いろいろな選手や学生や友達と練習の苦しさなどを話すことができ、凄く息抜きになる時間でした。

**山田** いい意味で息抜きの時間にもなっていたということですが、長澤さんは、授業を受けることをどういうふうに捉えていましたか。

**長澤** 大学ではサッカー部でアスリートとしての自分が居て、私は教職を取っていますが、教員になるための勉強や経営学の勉強をする自分が居ます。高校を卒業してプロフェッショナルになったサッカー選手はアスリートとしての道しかありませんが、大学に行ったことで、先生への道もあるし、経営を学んだ大学生の自分も居るし、アスリートとしての自分も居ることで、人間としての幅がとて広がったと思います。

**山田** 今の話を受けたうえで、話を1部のほうに戻します。1部では地域貢献などの話をしましたが、大学の中でアスリートとして頑張っていくといった場合には、当然ながら大学からの期待もあるでしょう。一方で、アスリートとして大学に貢献することもあると思います。また、社会や地域に対して、アスリートとしてこれはしなければいけないと思うこと

が、もしかしたらあるかもしれないと思います。

例えば、大学の中で考えた場合、大学アスリートとして、自分は大学からどんなことで支えられていると思うか、また、大学に対してどのように貢献できたと思っているか、まずは田中さんにお聞きします。

**田中** そうですね、私がオリンピックに出ることや日本で一番になることで、日本体育大学に対して恩返しができると思いましたし、私が頑張ることで、いろいろな人が応援してくれることも、選手としてすごく幸せなことと思いました。オリンピックを見てくれたと聞くと、私たちが体操の演技で感動や勇気を与えなければいけないと思います。でも、いつも、逆に勇気や感動をもらうことが多いです。

**山田** それは、田中さんがオリンピックやさまざまな競技会で活躍することに関しては、大学全体で応援してくれていることを肌で感じたということですね。

**田中** いつも感じます。こうやって休養しているときでも、応援してくれたり、支えてくれたりするのはすごく感じます。オリンピックに出たからではなく、普通に感謝しています。

**山田** よく分かりました。そうした点で言うと、長澤さんは言いたいことがたくさんあると思います。私を知る限りでも、ユニバーシアードでメダルを取って帰ってきて誰も知らない、何も祝ってくれないという気がします。本当はどうか知りませんが、私がそう思っているだけかもしれませんがその辺はどうですか。自分は精一杯頑張って、日本を代表してサッカーをやっているという中で、声援は感じていますか。

**長澤** 自分で言うのも何ですが、例えば、日体大や早稲田や筑波など、サッカーでも強いところはそれなりにすごくサポートされています。流通経済大学にはサッカー部専用のグラウンドが三つあって、専用のクラブハウスがあるという環境の中でやっています。

自分たち専修大学サッカー部は、今、日本の大学ではナンバーワンのチームになったと思いますが、そのチームが朝の8時45分までしかグラウンドが使えなかったり、そのグラ

ウンドが壊れてきていたり、また、クラブハウスもありませんし、雨の日はトイレに自分たちの荷物を置いて練習するような環境でサッカーをしているのが現実です。

環境に文句を言うのではなく、自分たちはその環境の中でもやっていけると思いますし、これからもどんどん強くなっていくと信じています。でも、大学からのサポートがもっとあれば、もっともっといいチームになると思います。

**山田** それは、大学の教員の1人ですから私にも責任の一端はありますが、より深い関係がある皆さん方、よろしくお願いします。一応、私もここからエールを送りサポートしたいと思います。

そうはいつでも、例えば去年日本一になったとき、リーグ戦と、準決勝戦、あるいは国立での決勝戦などできる限り試合は見にいて応援してきましたが、それを見ると割合大きな応援があります。決して相手校には負けていないぐらい大きな応援があって、専修大学の中では恵まれているほうではないかと思いますが、声援はどうですか。

**長澤** 決勝の舞台で、相手チーム以上に熱い声援を送ってくれたことが、ピッチでは凄い力になりましたし、その面では本当に感謝しています。

**山田** そういう声援が一応あるということは無理やり言わせました。無理やり言わせただけでお聞きしますが、そういう歓声があって、それに対して自分は、大学に何をどういうふうに返そうと思っていますか。

**長澤** 自分個人で言えば、大学へ還元できる一番のことは自分が有名になることだと思いますし、自分の名前が売れることで自分の母校の名前も売れると思います。他の面で見たら、専修大学のサッカー部がどんどん強くなって注目されるいいチームになれば、それが結果的に専修大学への恩返しになると思います。

**山田** 今まさに有名になることという言葉がありました。僕はいいことだと思います。1人あるいは2人、あるいはもっとたくさんだといいますが、トップアスリートがどんどん出ていくことがその大学の力になる部分がある

と思います。日体大の場合はそういう人がたくさん居て、その中の1人が田中さんです。

トップアスリートというか有名な人、ヒーロー・ヒロインが出ていくことは、大学にとってどういう意味があると考えていますか。

**田中** 凄くいいことだと思います。田中理恵という名前がこんなに世間に知られて、いい面も悪い面もたくさんありますが、私がこうやっていろいろなところへ出ていることで日体大の宣伝にもなりますし、体操競技だけでなく、今回の2020年のオリンピック・パラリンピック招致にも関わらせてもらい、いろいろなスポーツをみんなで応援しようという気持ちにもなりました。日体大に対しても、それでまた恩返しができると思います。悪い事件で出るよりは、「頑張っていますよ」と言っただけで出たほうが日体大にとっていいと思います。

**山田** それに関してもう一つだけ追加で質問します。有名になるということは、考えようによってはメディアの露出が増えるという意味合いと近いものがあります。私はあまりネットを見ないので分かりませんが、インターネット上で「田中理恵」と検索するともの凄く数のいいこと、悪いことが出ると思いますが、それも含めて、メディアとどういうふうに関わっているか聞かせてください。

**田中** オリンピックまでは、オリンピックを真剣に目指す中でこうやってメディアに関わっていくことで注目されることが毎日あって、言い方は悪いですが、私はメディアを利用しようと思いました。取材をしに来てくれてテレビに映りますが、自分がそのとき凄くいい演技ができれば、オリンピックやいろいろな大会でも堂々と演技を發揮できると思いましたし、自分の発言が、いろいろな人をどう気持ちにさせているかということも学びました。

厳しい世界だと思いますが、私が発言することによっていろいろな人の勇気や感動、元気を引き出せるのであれば、これからも、こうやっていろいろな仕事をしたいと思っています。

**山田** とてもポジティブに答えてもらいました。当然ながら、人によってはメディアに潰される場合もあります。その一線は割合微妙なものだと思いますし、田中さんの周りにもそのような理由でストレスを感じる人はたくさん居ると思います。その境界線はなんですか。

大学のことを考えれば、大学のブランディングのためになるべく出たほうがいいという面があります。一方で、付き合っていて疲れてしまうと自分が潰されてしまうという面もあると思います。

**田中** 人それぞれだとは思いますが、私の場合は、こうやって出させてもらうことによって日体大にもプラスになると思います。私が変なことを言うと日体大にも迷惑が掛かるということ、自分自身がよく自覚しています。

今年、世界体操のキャスターをさせてもらって、いろいろな失敗をしました。いろいろなことも学びましたし、いい経験もさせてもらいました。私がこうやって出ることによって、「日体大の田中さん、頑張っていたね」とか、「日体大の田中さんは、ちょっと言葉遣いがあれだったね」とか、いいことも悪いことも全部日体大に届くことを改めて知りました。でも、私は性格がきついので、メディアに負けることはないと思います。

**山田** では、優しいと言われている長澤さん、会報を見るとチームメートの評判もいいようです。最近ではメディアへの対応もだいぶ増えてきたと思います。特にサッカーの場合には、メディアからは「頑張れよ」とか、「勝てよ」とか勝利に関するコメントを求められることが多いと思いますが、メディアのプレッシャーをどう感じていますか。

**長澤** それだけ注目してくれることはとてもありがたいことだと思いますし、それがモチベーションになります。

**山田** では、長澤さんの場合は、割合、メディアはどんどん来いですか。

**長澤** そんなに言うほど来ていません。

**山田** 逆にもっと来てほしいですね。では、最後にお2人に質問した後、会場からの質問を受けたいと思いますので少し考えておいてください。皆さんに考えてもらっているうちに、もう一つだけ前半部分の質問をします。

先ほど、「地域」という話をしかけましたが、例えば、田中さんの場合、震災復興に尽力されて被災地に行かれましたね。そういう活動もされたと思いますが、いわゆる国レベルでのアスリートとしての活動と、一方の大学周

辺における活動で、何か違いなどありましたらお話しいただければと思います。

**田中** 私は、日体大を背負っていても国を背負っていても同じだと思っています。日体大近くの地域の方々にも凄く応援してもらっていますし、小さい子供たちが日体大に来て陸上や体操の体験をして、日体大のみんなは凄く感じてもらっています。また、日本代表として国を背負ったときには、オリンピックが終わってからになりましたが、遠くの被災地で演技会をして、私たちが頑張ることで復興を助けることができたいと思いましたが、勇気や感動をいろいろな人に伝えることができたいと思っていました。

でも、最終的に、アスリートは皆さんからの応援やパワーが必要で、逆にそういう人たちに助けられていることをいつも感じていました。ですので凄く感謝したいですし、私たちが輝けているのはいろいろな人のパワーや支えがあるからで、だからこそオリンピックも行ったと思います。選手が本当に感謝をする気持ちを持って、もっと頑張らないといけないと思っていました。

**山田** 長澤さんの場合はどうでしょうか。先ほど、専修大学としての地域の取り組みについて佐藤先生から紹介がありましたが、サッカー部あるいは長澤さん個人として、4年間の中で何かそういう体験はされましたか。

**長澤** 地域の子どもたちとサッカーをしたり、自分が1年のときは川崎フロンターレのスクールに教えに行ったりしましたが、専修大学周辺の方々への地域貢献の面では、まだまだ足りていない部分があると思います。

**山田** 川崎フロンターレに教えに行かれたとき、今度は自分が教える立場になって、俺はこれが駄目だ、逆に、ここは案外いいところがあると、何か新しく発見したことはありましたか。

**長澤** 1、2カ月前に教育実習に行きました。そのときも自分は指導者としてチームに関わらせてもらい、自分が中心となって練習メニューを考え、プレーヤーではなく指導者の立場でサッカーを教えました。例えば、選手に「こうだよ」と教えるとき、果たして自分がそれができているだろうかというふうに、教え



ることで学んだこともとても多くて、伝え方や練習の意図をより深く考えるようになり、チームを俯瞰して見られるようになったと思います。

**山田** まだまだ話が続きそうですが、後半部分では、大学アスリートにはどんな意味があるのか、なぜわざわざ大学に来て競技生活を送っているのか、というところをもう少し聞きたいと思います。

ここで一度、会場の皆さんからの質問を聞いてみたいと思います。

**質問者1** 経営学部3年に所属しています。初めまして。自分は役者を志しています。田中理恵さんに質問です。2010年世界選手権でエレガンス賞を受賞されましたが、床の演技を見て、多分体操の練習だけではあの表現はできないと思いました。自分が目指しているイメージと通じる部分があると感じました。体操から離れたところでも、何かエレガンスさを身に着けるためにやったことがあったら教えてください。

**田中** 私も演じるというか、体操競技をしているときは体操の田中理恵として演じています。ですので、バレリーナの演技を見に行ったり、シルク・ド・ソレイユを見に行ったり、表現する舞台をたくさん見に行きました。また、体操競技は見られるスポーツなので、自分は常に見られているという意識を持って練習していました。練習のときに、鏡の前でのポーズをしたらきれいに見えるかとか、ダンスを習うとか、体操以外でいろいろなことを見たりしたりしていました。

**質問者2** 経営学部1年に所属しています。田中理恵さんに質問します。(ロンドン)オリンピック(の演技)と、東京オリンピック・パラリンピック招致のスピーチと、どちらが緊張しましたか。

**田中** オリンピックです。東京招致のときも緊張しましたが、オリンピックを経験していたので。オリンピックの楽しさ、素晴らしさを英語でスピーチしましたが、東京招致のときはうまく伝えたいというのがありました。心臓がバクバクするぐらい緊張したのはオリンピックでした。

**質問者3** 経営学部1年に所属しています。長澤選手に質問します。僕も幼少期からずっとサッカーをやっています。長澤選手は背番号7番ですが、僕はポルトガル代表のクリスティアーノ・ロナウド選手が大好きで、背番号7番が大好きです。自分の中で勝手に特別な思い入れがありますが、長澤選手も7番に対して何か特別な思い入れはありますか。

**長澤** 中学のときからずっと7番を付けているので、7番を付けていると安心するところがあります。自分が決めたというか、チームの監督が「和輝は7番だろう」ということで付けさせてくれているので、これからも付けられるなら7番を付けていきたいと思います。

**質問者3** ありがとうございます。フル代表で7番を付ける日を心待ちにしています。

**山田** ユニバーシアードのときも7番でしたが、ネットで売ったりしませんね。

**長澤** 買ってくれる人は居ますか。

**山田** 今のは冗談ですが、サッカー部でもユニバーシアードでも7番をずっと付けているのは周囲も7番を認めてきていることだと思いますが、この専修のユニホームより、やはりあっちのユニホームのほうがいいですか。

**長澤** そうですね。でも、専修のほうがいいと思います。一応、専修のシンボジウムなので。

**質問者4** 人文ジャーナリズム学科1年に所属しています。先ほど横浜Fマリノスや川崎フロンターレの話をしていましたが、長澤さんの進路がとても気になっています。報道では横浜Fマリノスを断ったという話も出ていましたが、いつ頃決まるとか、言える範囲で教えてくださいませんか。

**長澤** まず、横浜Fマリノスは断っていません。教育実習に行ったり、ユニバーシアードがあったり結構忙しかったので、最終的には最後にオファーをもらった三つのクラブから話をお聞きし、自分の中で気持ちを整理して決めようと思っています。ちょうど今、クラブに話をしてもらっている段階です。そんなに考えて引き延ばしても断りを入れるクラブに迷惑が掛かるので、10月の終わりから11月初め辺りに決めようと思うので待ってください。

**質問者5** お2人に質問します。恋人が居るときはパフォーマンスの質は上がりますか。





特に長澤選手に聞きたいですが、田中さんにも聞きたいです。詳しく教えてください。

**田中** 私は恋愛と体操は別物です。1人の選手として体操競技をしているので、彼氏が居る、居ないはあまり変わりないです。

**長澤** 僕は、居たほうが上がると思います。彼女の居る、いないはプライベートなので。

**質問者6** 経済学部経済学科に所属しています。お2人に質問します。スポーツをしていると困難にぶち当たるのがとても多いと思いますが、そういった自分の壁にぶつかったとき、どういうふう乗り越えていますか。

**田中** 高校の3年間は足の痛みや腰の痛みがあり、また、成長期の自分の体の変化についてとても悩みました。大学1年のときには足首の手術をしてリハビリ生活をしました。

私の家族は全員が体操競技をやっていて、兄弟3人とも体操選手です。なので、兄弟に悩みをぶついたり、同期の選手に、不満やどうしたら強くなれるのかという悩みをたくさん話していました。

私の場合は、何か不満や悩みがあれば信頼できる人にすぐ話します。そして、アドバイスをもらおうとまた頑張ろうという気持ちになるので、友達に感謝しています。

**長澤** 困難と思わないようにというか、発想の転換をしようと思います。一見大きな壁に見えたとしても、それが自分の成長の機会だと思えば、それは困難ではないと思います。多分、世界で活躍するトップアスリートは誰もそういう考えを持っていると思います。ブレークスルー思考と言いますが、困難とは思

わずに、自分のチャンスと思って取り組みればいいと思います。

**山田** ありがとうございます。では、もう1回ステージに戻して、最後に話をしたいと思います。今日のタイトル「カレッジスポーツの限界と可能性」ということで、先ほど、最後に学生アスリートの意味合いについて話してくださいと言いましたが、今の、困難にぶち当たった場合、田中さんは家族が大きな力になったと同時に友達の手も助かったという話がありました。長澤さんは、ある種、自分の精神のコントロールをうまくやっていくという話が出ていました。

それらを踏まえた上で、大学の学生であるということに、何か大きな意味合いを感じることはありますか。

**田中** スポーツだけをするのではなく、大学へ行って仲間、チーム、先輩・後輩と出会うことによって、人間的にも育つんだと思いました。スポーツしか知らないのでは人間としてはまだまだなので、いろいろな人と話をすることや、いろいろな人と出会い、体操以外のことを知ることは、人間的にも成長します。私の中ではオン・オフが凄くしっかりできて息抜きにもなるので、仲間の絆はとても大切だと思います。それを、大学の体操競技部以外で学びました。クラスの友達や先生方からです。

**山田** それは、日本体育大学という大学のメリットですか。それとも、大学生であればどこでもでしたか。

**田中** オリンピックに出たから凄いという

わけではないと思うので、人間的にも成長していないと、オリンピックに出た意味もないと思います。日体大ではそこを凄く学べ、育ててもらえると思います。

**山田** 長澤さんの場合は、客観的に大学アスリートとはと考えたことはあまりないと思いますが、例えば、体験的に専修大学の学生でよかったということはあるですか。

**長澤** 専修大学を卒業していないのでまだ分かりませんが、今まででこの大学に来てよかったと思うことは、田中さんが言われたように絆や仲間だと思います。今日もこうやってサッカー部の仲間が見に来てくれて、4年間、毎日ともにトレーニングをした仲間の絆はかけがえのないものだと思います。それがまず一つよかったと思うことです。

あとは、どの大学に行ってもそうだと思いますが、大学4年間で社会へ出るまでの休憩と思っている人も居れば、その4年間で努力して成長した人も居ると思います。自分は、どうやったらサッカーがもっとうまくなるだろうと考えた4年間でしたが、これから見えてくると思います。

**山田** ちょうどそこを聞こうと思いましたが、田中さんの方が答えやすいかもしれません。競技生活は長いですが、ずっと続いていくものです。サッカーでも小さいときからずっとボールを蹴ってきたと思いますが、その中で大学の生活はたかだか4年間です。大学院に行ってもプラス数年間の計6,7年間ぐらいしかないで、非常に限定されていると思います。

その限定されている期間は、競技生活の中ではどういう意味合いがありますか。

**田中** 体操競技はプロがありません。また、長くできない競技ですし、ピークが18歳から20歳と言われている中、私は25歳でオリンピックに出ました。体操競技は、引退してからの人生のほうが長いです。この年で現役を続けている選手はなかなか居ません。ですので、この人生の中のたった4年間または7年間ですが、勉強も体操も両立してできる時間はこの期間しかないと思います。体操だけやるのではなく、日体大の中でいろいろな人と話をし、いろいろな先生にお世話になって、いろいろなことを知りながら出ていくことが、引退して社会に出たときに私にとってプラス

だと思ったので、この7年間を濃く使いました。

**山田** そういう話を聞いて長澤さん、まさに濃い4年間の真っ只中に居て、それがもうすぐ終わろうとしています、この限られた4年間を振り返って、自分の中ではどういうふうに捉えて過ごしてきたのか。あるいは、先ほど絆と言いましたが、別に大学に来なくても、クラブチームにも当然チームメートの絆はありますが、大学だからということでは何か思うことはありますか。

**長澤** もともと高校のときにプロにならなかったのですが現実はなれなくて、大学に行って自分を磨いてもう一度プロで勝負したいという気持ちがあって、そのための4年間にしようと思ったのが一つ。また、プロサッカー選手の寿命は26歳で終わってしまうと思ったときに、田中さんも言いましたが、引退した後の人生、スポーツ選手ではなく普通の社会人としての人生のほうが長いと考えたときに、大学の4年間ではサッカーだけをするのではなく教養を身に着けようと思って、その二つの意味で、大学の4年間を過ごそうと思えました。

**山田** 1部では割合大きな話をして、2部では、敢えてお二人の身近な経験から話を聞きました。それらを通じて、今日1日の中で、カレッジスポーツとは何か、大学スポーツにはどういう意味があるかということ、皆さんに少しでも感じてもらえたらいいと思います。感じてもらうためにはもう少し目立たなければいけないというか、最初の話に戻りますが、田中さんは「目立ったほうがいい、それによって大学も盛り上がっていくし、自分の力も発揮できる」という話をしました。

長澤さん、それで言うと専修大学がもっと注目されるために、あるいは長澤選手個人として、7番がもっと注目されるためにはどんなことを期待しますか。きちんと練習場を用意して欲しいというハードの面は聞きました。他はどうですか。思い切ってどうぞ。

**長澤** こういふふうにピックアップしてもらうためには、もちろん自分たちが結果を出し続けなければいけないのは当然ですが、こんな結果が出た、こんな選手が居るともっと広報して欲しいです。自分の代にもプロに行く選



手が2人居て、下の代に北爪健吾が居ますが、彼もプロになると思います。今後、プロになる選手がどんどん増えて、いずれは専修大学の選手が日本代表にどんどん入って、専修大学のサッカー部が日本のサッカーを支えることになるかもしれません。それを、専修大学が広報してくれたら嬉しいです。

**山田** 最後は声が小さくなりましたが、広報もPRしなければいけないと思いますし、そのPRに呼応して僕ら教員もそうですし、ここに来ている学生の皆さん方も応援に来ることが大事かもしれません。次は何戦ですか。

**長澤** 次は筑波戦です。

**山田** 筑波戦ですね。若干遠いかもしれませんが、試合をするときに、みんなが行って応援する、あるいは、先ほど松浪先生はだらしない野球部と言いましたが、その野球部も応援がないと頑張らないうちかもしれないので、大学全体で応援に行くことも大事だと思います。

最後にもう一つ田中さんにお聞きしますが、そういうふうにかレッジスポーツを盛り上げていくという点からすると、まさに、オリンピック・パラリンピックの招致で盛り上げ役のトップをやっていますね。その経験からすると、どういふことをすると盛り上げられる、あるいはみんなの注目が集まると思いますか。カレッジスポーツが、日本のスポーツ全体の中でもっと人気が出るといいですね。なかなかそうではなくて、プロのスポーツなどとは違うところもあると思いますが、どう考えたらいいですか。

**田中** 私自身の場合ですと、オリンピック・

パラリンピックの仕事をする中でいろいろな人が注目してくれたので、まずは選手自身や大学全体が頑張らなければ結果は付いてこないと思います。きっと日本人は、みんなで応援するという気持ちになれば凄い力になると思います。

**山田** どうもありがとうございます。では、最後に、どうしても意見を聞きたいという方が居たら、1人だけお聞きします。

**質問者7** お二人の今後の目標や夢などをお聞かせください。

**田中** 全く考えていなかったのですが、今はいろいろな仕事をさせていただいてる中で、スポーツの楽しさを伝える仕事にすごく興味を持っています。ですので、そういう部分で、もっといろいろなことを勉強したいと思ったり、いろいろな人がもっとスポーツを好きになるために、この話で言えば、いろいろな大学へ行ったり、いろいろなことを知ってもらえるように、自分ももっと頑張らなければいけないと思います。最終的な夢は結婚です。ありがとうございます。

**長澤** 目標は、専修大学サッカー部のリーグ3連覇で日本一になることです。もう一つ先の目標は、プロとしてJリーグで活躍することです。自分がここまで成長できたのは周りの人たちのおかげだし、いい経験ができたので、プロサッカー選手はみんなの夢でなくてはいけないと思うので、夢は、子どもに夢を与えられるサッカー選手になりたいです。

**山田** どうもありがとうございます。